

梅岩と尊徳

－布施と推譲－

山 崎 益 吉

An Inquiry into the Fuse, Suijou in Baigan and Sontoku.

Masukichi YAMAZAKI

I はじめに

政治家、官僚、さらに民間にいたるまで、経済倫理は一体どうなっているのか。まさに、無秩序状態であると言っていいであろう。政治家が不祥事で自ら命をたち、死んでお詫びをいたしますといった例は枚挙に暇ない。必ずといっていいほど金銭が絡んでいる。あるいは、口利きと称し金銭となんらかの関係をもち、收拾がつかず、大臣までが自殺する時代である。大臣とあらば一国の長に近い。修己治人を一番よくわきまえていなければならない地位にある。その大臣が金銭に纏わるスキャンダルで自ら命を絶つというのでは、国の金銭感覚を疑わざるをえないのは当然ではないか。¹⁾さらに、追い打ちをかけるように防衛省の次官が武器を取り扱う商社から多額の接待を受け、見返りとして便宜を図ってもらう、というのであるから呆れてものが言えない。²⁾

呆れるのは政治家や官僚ばかりではない。民間企業とて程度の差こそあれ同次元である。賞味期限切れの商品を回収し、日付を代えて再販ルートにのせ、中身の違う商品を平気で販売している。偽りと承知しながら堂々と販売しているが、二重の利を吸い上げるという次元の問題を乗り越えている。³⁾嘘が暴かれたら「申し訳ありません」と深々と頭を下げている光景が目につくが、何とも恥ずかしいかぎりではないか。商人は梅岩ではないが、正直が原点である。商人と屏風は直ぐでなければ立たない。曲んでいたのでは畳まれない。三重県の老舗和菓子メーカーは賞味期限切れの商品を回収し、販売ルートに堂々とのせていたというから驚きである。添加物は一切使っていませんという表示にもかかわらず、添加物の使用が検査の結果分かり、「つい使ってしまった」、といいわけをしている。これが数百年の歴史を誇る老舗和菓子メーカーなのかと呆れるばかりである。

個人レベルでも詐欺まがいの行為が跡を絶っていない。振り込め詐欺あるいはこれに類似する話題はこれまた枚挙に暇ない。天知る地知る我知る人知るでいずれ不正は明らかになる。⁴⁾信なくば立たずである。これほど幼稚なことは他にはそうないであろう。これでは尊徳や梅岩が嘆くのは当然ではないか。隠徳善事どころの話ではない。⁵⁾富者の任務は推譲にありとする尊徳

に申し開きできない。これではマイナスの推譲、布施ではないか。いやマイナスの推譲、布施どころの話ではない。これらの一連の行為は一種の犯罪である。推譲や布施で論じられる次元の話ではない。

豊かさの中の貧困現象なのか。それとも経済時代の落とし子なのか。豊かさの中の貧困現象であるならば、何がそうさせるのか。豊かになるために馬車馬の如く働いてきたのではなかったか。とすれば厳しく働いてきたのは何のためか。従来、商品はよき物であるはずである。goodsが商品である。badsではない。尊い労働を投下するのであるからgoodsでなければ浮かばれないではないか。「祈りかつ働け」が近代資本主義の原点ではなかったか。「私の目の黒いうちは儲けさせてもらいます」という次元でさえ、批判されたではないか。資本主義が成熟しているにもかかわらず、その精神からはずれる経済行為はどこからくるのか。個人でも企業でもまた一国を預かる政治家までもおしなべて地に落ちてしまった。推譲や布施とまでとはいかなくとも、せめて正直を宗とする本来のあり方に立ち返るべきではなかろうか。尊徳と梅岩の経済観を探ることによってその点を明らかにしていこう。

II 梅岩と布施

1. 二重の利

梅岩は布施を強調する。梅岩の基本哲学は勤勉、節約、布施である。商家で丁稚奉公をしながら独自の哲学を形成していった梅岩は、究極的に布施を強調する。布施は仏教用語であり、お布施として一般化している。「梅岩は神儒仏悟る心は一つなり」と謳う⁷⁾。彼は何をよりどこにするかは問わない。神儒仏どれ一つを採ってみても大きな論争が繰り広げられる問題であるが、梅岩はそうしたことにはあまり興味を示さない。それどころか、いずれの法を採ろうとも心を明らかにするものであればそれでよいとする。だから、彼は役に立つものであれば「心の磨種⁸⁾」として受け入れる。心を窮めるために役立てば手段は何を選択しようとも構わないではないか、と平然としている。我が心を磨くところが手段であればそれでよいとする。神道か、儒教か、仏教か、目くじらを立てて論争し、挙げ句の果て血の雨が降るほどの問題でも、彼にとってそんなことはどうでもよいことであった。

譬えて言おう。北海道に行くのに飛行機で行こうが列車で行こうが、または車で行こうが、そんなことはどうでもよいことである。手段として用いるかぎり目的地に着けばよいことになるから、乗り物で騒ぎする必要はない、というのが梅岩の真意である。儒教、とくに朱子学は、『大学』の序で異端寂滅の思想は高遠であるが益なし⁹⁾、と断罪している。神道は儒教にたいして作為論であるとし、自然の道からはずれているから採るべきではないと強調しているからいかに融合が難しいか、この一言で分かる。仏教は世俗からかけ離れ、隠遁生活に真理を見いだそうとしているが、これでは世情から遊離してしまい現実問題として宙に浮いてしまいかねない。いずれも融合しては立ちゆかないと見ている点では厳しさがある。基本的に宗教戦争である。宗教は本質的に妬みであるから他を寄せ付けないところに特色がある。排他的である。我こそは本物である、と皆そう思いこんでいる。

梅岩はそうしたことに関心を寄せない。梅岩は江戸の学者のにあってあまり評価されていな

い。折衷学であるゆえ学問に貢献していない、というのが彼に下された評価である。とくに、丸山真男はそうした視点で判断している。「神儒仏悟る心は一つなり」は、まやかしであると言いたいのであろう。だが、現実に商人、町人の心を癒してくれたのは心の学としての心学ではなかったか。荻生徂徠を頂点とする学者群は時には政治と深く結びつき、御用儒者となり民衆を取り締まる側にまわった。赤穂浪士の一件はその典型である。徳川さえ安泰であればよい。徂徠の作為が目に見えている。徂徠は大学者である。文字を残したという点で江戸時代の学者を代表している。しかし、彼は徳川政権の太鼓もち的な存在であり、民衆の心を和ませるような学者ではなかった。先王の道を強調する彼の学説から修己治人の基本哲学は出てこない。むしろ、横井小楠が詳論するように、徳川の便利私営に手を貸すという形で貢献したとしか言いようがない。彼の学説からは布施などという精神はみじんもない。ある意味で、徂徠は観念論者であったと言ってよいかもしれない。なぜそうなのか、諸悪の根元の源は徂徠にあるとみていいであろう。徂徠には修己治人という発想は稀薄である。私生活でいくら欲望を丸出しの態度にしようとも、治人において優れていれば、他のことは問わないというのが徂徠の考えである。口利きや、二重の利などは問題にはならない。天道と人道は彼の場合分断されている。天道を考える必要はない。天、誠の発想こそ時代遅れなのである。誠は人道に入り込む余地はない。人道において優れた業績を挙げるならば天道の支配は受けない。ここでは天道と人道は分断されていることになる。修己治人の学問体系はない。

換言すれば、欲望の独り歩きが許される。欲望の独り歩きを抑圧していたところこそ問題があるとみる。いわゆる個の解放である。個の解放にこそ意義があるとみる。誠で縛るのは時代遅れであるという。『中庸』の性道教はここでは時代遅れとなる。¹²⁾「本然の性」は無視される。無視されるというよりは否定されてしまう。「氣質の性」が前面に出てくる。欲望を承認し欲望の赴くままに個の主張を承認するという方向である。天道、誠は邪魔になる。世俗の力関係が問題となる。目的のためには手段を選ばない人間、社会が出現する。

その結果、どうなるか。解放された個の中でなにが一番大手振るうか。井原西鶴がいみじくも言っているように、¹³⁾ 誠から解放された社会で大きな振る舞いをするのは名誉 (honor) でも性 (sex) でも権威でもなく、金、銀、カネ (money) である。「金のないのは首なしや」。従って、「金銀が氏系図」になる世である。「万事金の世の中」ではすべての価値がカネの前に平伏す。古ごけた婆さんの膝元に若き僕を跪かせるのもきらきら光る黄金である。カネの前にはすべてが転倒してしまう。近代社会の本質がここにある。すべてカネに服従し、本末転倒した社会が出現する。困ったことであるがこれがカネの社会の実態である。天道などどうでもよいことになる。カネが正義になる。誠、天帝、神慮が背後に退いた社会では手段が目的となり目的が手段となる。本末転倒した人間関係が大手を振るう。

だが、梅岩はそうした社会を推進しなかった。あくまでも誠に拘った。性を重要視した。性とは物の本質、「本然の性」である。氣質の対にある人間存在の根拠と言ってもいい。言い換えれば、仁義礼智信と言ってもよい。さらには心、愛、慈など社会を成立する原理と見て良いであろう。梅岩にあって口利きは御法度である。倒れ者から礼銀を受け取ることなども禁句である。二重の利は毒をもって自ら死すに等しい行為とみる。¹⁵⁾ よく働きよく施す。¹⁶⁾ ここに梅岩の社会発展の原動力があると言える。富は社会が発展するための原資である。節約を人類愛まで

高めた梅岩の節儉はまさに救済を意味している。だから、本来の節儉は単に自分のためにだけに使うという次元の問題ではなかった。自分のために使うのであれば、これは節約ではなく吝嗇に近いと梅岩はみる。吝嗇と節約は大いに違う。真の節約は社会のため、世界のためともに立ちゆく道を模索することに主眼がおかれる。節約が正直と直結するのはそれがためである。正直でなければ節約の本来の意味は出てこない。つり銭をごまかすという発想は真の節約からはほど遠い。割り勘の時にいつも消える人がいるが、これなどは言語道断、節約の真意も勤勉の本質も理解してはいない。さらに、奢り高ぶっている精神から真の節約は生まれえない。なぜならば、身の奢り心の驕りが身を滅ぼした例は歴史を繙くまでもなく枚挙に暇はないではないか。消費者の目をごまかす程度のことを平然として行える人はケチの部類に入る。だから、天道が何であるか、道に恥じない行為が何であるか理解できず身の破滅に至ると梅岩は教えている。それゆえ、よく貯えよく施し世界のために使うようにすれば、ちょうど自然界にあって植物が繁茂するように、人間社会も繁栄すると梅岩は強調してやまない。売り手の幸福、買い手の幸福こそ商いの本意なれ¹⁷⁾ということになる。

2. よく貯え、よく施す

だが、昨今の商いはまさにこれとは方向が大いに狂っているのではないか。他人に気づかれなければ何をしようが構わないというのでは、他人の目は誤魔化せても自然の目、天の声を誤魔化すことは出来ない。嘘がばれなければいいという風潮では布施などは夢の又夢ではないか。人に人格があるように企業にも人格ならぬ社格があるはずである。企業は人なり、であるから経営している人の人格が問われる。メセナや布施をやっている企業は二重の利や二升を掻くようなことはしまい。染物屋の染め違いを責め、利をかすめ取るようなことも御法度である。寸足らずの反物を正規に販売するようなことはしまい¹⁸⁾。なぜ、こうしたいづれ天知る地知る我知る人知るにもかかわらず嘘を押し通すのか。嘘が露見して深々と頭を下げる。破廉恥極まりない¹⁹⁾。

やはり、心の種磨が必要なのであろう。商人、町人は忙しさにかまけて、ややもすると、心の洗濯を怠りがちである。心の洗濯がどうしても必要であるがその暇さえないというのが実情である。日々の生活に甘んじ、心の洗濯をしないで、世俗にかまけてしまうため誠意からの発想であるか問わなくなってしまう。本来ならば誠意で再度確認する必要があるが、それが出来ないところに問題がある。忙しさにかまけてその手続きを怠るからである。そのためには心の種磨によって、心をつねに磨いておく必要がある、と梅岩は強調する。三浦梅園は自然にそれを求めた。天道によって人になる道である。心を豊かにするために自然のなかでさらけ出すことによって心を選択する行為である。何の汚れもない自然によって心の汚れを取り除く行為だ。天道による本心の呼び戻しである。どうぞご本心にお従いなされ、とはこのことを言ったものである。ここからは誤魔化しは出てこない。誠意で呼び返す行為が行えるからである。

徂徠に較べれば梅岩は学者ではないかもしれない。しかし、彼は生きて生活する現実の社会を経験している。生きた人間から出発している。商人、町人の苦勞をよく知っている。人間いかに生くべきかを他の誰よりも心得ていたと言っていいであろう。ここに梅岩の強みがある。心学は徂徠のように大上段に構えない。身近な生活から出発する。とすれば「神儒仏悟る心は

一つなり」の意味もよく理解できる。いくら大上段に構えても庶民生活一つ救えないようでは、空念仏に等しい。徂徠学が近代に近づくにつれいかに形骸化、弊害化していったかは史実が示すとおりである。横井小楠の活躍した肥後熊本でも例外ではなかった。功利の術が限界に来たからである。功利の術は幕末に近づくにつれて機能しなくなっていく。むしろ邪魔にさえなる。限界に来ていたからである。限界に来ていたということは、徂徠学が徳川の代弁者であったことに起因している。各藩にとって桎梏化の理由は、基本的に徳川の代弁者であったからに他ならない。横井小楠の実学派誕生がこの事を端的に示している。それに較べるならば梅岩にはそうしたところはない。出発点は保守的であったが革新的に映るのは本質をよく押さえていたからではなかろうか。近代社会がおかしくなっているからではないのか。これはちょうど徂徠学において徳川がおかしくなったのと同じ現象を呈していると言ってよい。ということは、梅岩が人間生活の本質をよく見抜いていたからではなかろうか。町人、商人一般の生活のなかにあって、日々の生活が安心して暮らしていけるようでないという意味がないからである。いくら高尚なお題目をあげたところで宙にういていたのでは意味がないからである。梅岩は卑近なところに目を向ける。親子、兄弟、姉妹、朋友など卑近な例から説きおこす。儒教は難しい話はしない。まさに近思録なのである。商人、町人の生き様を強くうたいあげた。武士にも劣らないというのが梅岩の真意である。だから、『都鄙問答』は命がけの出版であったわけである。

体制とも関係せずただ商人、町人、庶民の経済生活に本来の生き方があることを論証しようとした梅岩は、丁稚奉公の経験が中心になって論理が組み立てられる。商人というよりは人間としてのあり方がそこにある。袷を取り去るならば人間いかに生くべきかは身分の差を超えて同じではないかというのが梅岩の主張である。とするならば、人間に共通な生き様は、基本的に働くという行為を通し位置づけられなければならない。商人の利は武士の禄、農民の農産物と同じである。袷を脱いだ生身の人間は労働以外にはない。労働のあり方が勤勉であるかによって位置づけられねばならないとすれば、勤勉をさらに充実するために浪費を慎まなければならないのは当然である。さらに、勤勉を効率的に高めるために儉約が必要である。勤勉と儉約は富獲得のため車の両輪である。だが、梅岩の儉約のあり方は特異な存在である。梅岩は儉約は人を愛することであるとまで高める。荻生徂徠がどれほどの学者を自負しようが彼らは、ここまで儉約を高めることは出来ないであろう。他の学者と雖も然りである。安藤昌益でも無理である。梅岩は儉約をこう主張する。三つ要るところの物を二つで済ませるならば、他の一つは他の世界のために使いなさいと。節約は人を愛することである。これは一種の人類愛である。儉約を人類愛まで高めた人をこの時期に探すことは出来ない。今日でこそ地球有限時代の到来とともに自然と人間の共生が焦眉の急になっているが、江戸時代中期に儉約を人類愛まで高めた人は皆無である。梅岩はよく貯えよく施すと強調して止まない。布施の精神である。梅岩はいくら富者であっても自分のために使うのであれば、これは吝嗇の部類にはいると言っている。自分の財産であるから自由に使うのは勝手だが、それでは単なる金持ちであって人のため世のためになっているとは言い難い。布施を人類愛までに高めるためには人間の資質に関わるから、梅岩は心学を勧めるのである。どうぞご本心にお従いなされ。難しい言い回しはしない。誰でも分かる。生業のなかで難しいことは長続きしない。よく働き、よく施す。単純極まりない。単純は真理に限りなく近い。正直と商人を結びつけるのも単純極まりない。商人でなくとも正

直でなければならない。でなければ、商人というよりは人間として失格であろうから、正直はなにも神道に限ったことではない。二重の利への戒め、二升を掻くことの戒めは正直を宗としたからである。染物屋の染め違いを責め利を吸い上げるなどと言うことは論外である。正直に商売をしないから口利きが罷り通る。口先三寸で渡りを付けるなどと言うことは、梅岩にあっては人間の片隅におけない存在として映る。口利きは上に大半の責任があることになる。防衛省次官の口利きは二重の意味で上に責任がある。地位や役職を利用しての口利きは下には責任はない。すべて上に責任がある。企業による不祥事はトップの責任である。社長が下の者に責任を転嫁するなどということは言語道断である。会見を見る限り自分には責任がないような口ぶりで話すトップがいるが論外である。梅岩に言わせれば二重に欺いていることになる。ふたを開けてよく精査したところ社長からの指示であったことが知れるが論外である。上に立つ者が責任を取らなくてはしめしがつかない。梅岩に言わせれば原点に返れと言う。商売であれ生産であれ正直があらゆるものの出発点であるという。商人も屏風も平らでなければ畳まれない。もっとも基本的は単純なことが近年忘れられ、一連の不祥事を引き起こしているが、梅岩のこの言葉をよく胸に当ててみる必要がある。何事も信なくば立たずである。仁義礼智信が基本である。このもっとも単純なことが忘れられた結果、一連の不祥事が起きていると考えた方が良いであろう。

梅岩は心の磨種を強調する。神儒仏悟る心は一つなりはそのよい例である。本心に立ち返ることである。本心に立ち返らねば布施などは出来ない。本心とは何の汚れもない赤子の心つまり赤心である。だから、心学は赤心を明らかにするように日々勤める。商人は日々の仕事に追われ忙しいから、心に積った垢をすり落とさなければならないという。他の場合、学問はできるだけ心に積み上げることであり心得ているが、梅岩は逆である。商人は忙しくせわしいからむしろ心の垢を落とすように勤める必要がある。一枚一枚心の垢をめぐって最後に残った本物の赤い心が本心である。本物の心が本心となる。だから梅岩はどうぞご本心におしたがいなされと説く。これとちょうど逆の立場が、放心である。心ここにあらざれば見えども見え、聴けども聞こえず²¹⁾。一連の不祥事がまさに放心に相当しよう。赤心をもって行動していれば二重に利を取ったり、二升を掻くようなことはないはずである。口利きによって下の者を犠牲にして利を稼ぐようなことは言語道断である。単純なことであるがこれ以外にはないのである。

3. 企業と文化

そこで、視点を変えて論を進めることにしよう。それは企業に文化度が必要であるという事である。口利きを行つような人達がいかに文化度が低いかということを知りたい。文化とは心の耕しであるから梅岩に言わせれば、赤心、本心を取り戻す行為と考えてよい。企業でも個人でも文化度にある程度精通していれば、今日に見られるような不祥事は起こらないであろう。換言すれば、誠意があるかどうかである。誠意は文化度のバロメーターであるから文化度に優れている人や企業では不祥事は生じない²²⁾。企業は人なり。企業といえども誠意が基本であるから法人といえども文化力に精通していなければならないのは当然である。一般的な風潮として企業に文化はいらなと思われがちであるが、けっしてそのようなことない。人でも個人でも文化度がバロメーターであることに代わりはない。だが法人となると人格と関係ないかの

ように錯覚されがちであるが、これは基本的に誤りである。法人が優れているかいないかはトップの判断、文化力で決まる。

ここに、ある文化力に優れている法人長岡建設を紹介しよう。長岡建設は長岡今朝吉氏が興した優良企業である。優良企業という意味は営業成績が良いというよりは文化度が高い、社会貢献度が高いという意味においてである。梅岩と同様今朝吉氏は学歴はほとんどない。農家の次男として生まれ、東京に出て持ち前の勤勉、誠実さで財をなし、布施を実行している。企業的に成功するためにはいくら資質があっても、巡り合わせも大いに関係してくるが、長岡今朝吉氏が偉かったのは、長岡家に伝わる伝統的な文化力を受け継いだことである。父福松翁は地元でも有名な文化人である。地藏尊を県の文化財に登録するために奔走した知る人ぞ知る文化人であった。今朝吉氏は父福松翁の血をひき、企業に文化力が必要であると考え、回り道のようなのであるが文化に力を入れ経営にあたってきた。一つのエピソードを紹介しよう。まだ駆け出しのころ基会所に通って草履番のようなことをやっていたが、そこにやってくる人達が優良企業のトップであった。今朝吉氏は草履番として参加し、次第に参加した大企業のトップに目をかけられていった。草履番としての今朝吉氏の赤心、誠意が伝わって大企業から直々に注文が来るようになったという。信用されたのである。赤心をもって接した結果であった。次に今朝吉氏がやったことは、企業のトップと話す時、困ったことがあったという。それはトップの人は絵画に通じていたため、話題に入ることができず困惑したという話である。そのため、今朝吉氏は絵画の研究に力をいれトップと話題を共有できるようになった。長岡建設ではその後今日に至るまで絵画の収集に力をいれ、さらに偉いことに、その絵画を惜しげもなく寄付していることである。推譲、布施の極みである。例えば出身地甘楽町には高価な絵画をいくつも寄付、布施している。町ばかりではない。生まれ故郷造石長岡家に縁のある寺院や地域に高額の寄進を惜しまない。富者の任務は推譲にありを実践している。今日まれに見る優良企業である。ここからは二重の利や二升を搔く、口利きなどは縁遠い。やはり、トップの経営理念がしっかりしているかにかかっているかのよい良い例である。²³⁾

III 尊徳と推譲

1. 天道・人道

梅岩が布施を説くのに対して尊徳は推譲を提唱する。推譲とは推し譲ることである。尊徳は単に物を譲れなどと短兵急な推譲を提唱したのではない。彼の説く推譲は天道人道論なる宇宙の存在、人道の極みなどの視点に立脚している。天道すなわち大宇宙の存在は小宇宙、人道にとって前提である。²⁴⁾ 人道はどうあがいても天道から抜けることは出来ない。人道は天道によって規定されている。人道における推譲はどう進めるべきか。尊徳は睦も譲れ、功績も譲れ、言も譲れと言っている。²⁵⁾ 常人にはまねの出来ないことである。一生懸命働く点では梅岩も尊徳も同じである。勤勉にして節約し、富者の任務は推し譲ることにあると強調して止まない。尊徳には分度という独特の考えがある。分度とは何か。斉藤孝之の『報徳外記』の伝えるところによると、分度のうち分に相当するものは天分であり、それゆえ分度とは天道、人道の別名にほかならない。²⁶⁾ 天道はいくら動かそうにも動かせない。換言すれば、分度とは天道、人道の別名

と言ってよい。人道は天道を超えることは出来ない。いくら人道において努力しようとも、天道の範囲内にあることは植物の葉ひとつできないではないか。いくら科学が発展しようとも、植物の葉ひとつできないというのが実情ではないか。近年宇宙開発が急速に進歩してきているが、まだ天道の枠の中にいる。宇宙船を打ち上げるまでにはなったものの現実には地上での生活と同じというわけにはいかない。だから天分なのである。人道の方は天分の中で実践する以外にはない。天道を飛び出すわけにはいかない。宇宙生活では骨がもろくなると言われている。

人道は小宇宙、天道は大宇宙のなかに組み込まれていることになる。これは人間や他の動物と植物や他の生き物を考えて見ればよくわかる。要するに、それぞれの地位、分が与えられているゆえ人道を尽くすことは天道の範囲内ということになる。これを無視して経済生活は不可能である。この事は天道つまり天分の偉大さの新たなる認識である。尊徳はこれを命分なる用語を使っている。人間の命分、植物の命分、禽獣の命分。それゆえ尊徳にとって、天道からくる分度の法則は、自然法則と考えても良い。自然法則の中に人道を立て、人道のあり方は勤勞如何に関わっているということになる。²⁷⁾

人道は天道を受けて発展する以外にはありえない。分度の具体的な例を見ておこう。分度は人倫の極地であるという。分度を立てればまず成功したと見ていい。なぜ、尊徳はこういう考えにたどり着いたのか。江戸時代土地に縛りつけられ年貢はもちろん諸行事に駆り出された農民は、分度を守ろうにも守れないことはよくある。一例を挙げよう。分を総収入と考えれば、度は総支出である。総収入から総支出を引けば、プラスもあればマイナスもでる。プラスになるように勤め、プラスは自讓と他讓に費やされる。しかしプラスにならずマイナスになることもある。問題はマイナスになる場合の人道のあり方が問題である。自然の脅威や封建領主の気まぐれによる収入源はよくあることであるが、問題は天道における人道の一般的な関わりである。勤勞が分内に止まり、逸樂が分外に外れるようでは推讓などは覚束ない。尊徳に言わせれば怠惰である。怠惰では推讓などは夢のまた夢である。同じ推讓でも尊徳は他讓を力説している。推讓の極みであるからである。身内にいくら推讓してもそれは真の推讓にはなるまい。富者の任務は他讓にあると言えるからである。²⁸⁾度は経費である。分度、収入から経費である度を引けば分外。分外は利益と考えられるから、この分外を何に使うかという問題が持ちあがってくる。尊徳はこの分外に対してもきちんとした答えを出している。自讓と他讓がそうである。自讓とは自分の親族への推讓、他讓は地域、国家への推讓である。推讓が的確に行われるには分度をきちんと設定しておく必要がある。分度を立てれば尊徳の仕方は半ば成功したも同然であると言われた。分度を立てるとは例えば次の如くである。総収入が仮に500万円とする。尊徳は総収入を12で割り、一日の経費を算出する。どの程度の支出をしなければならないかは一目瞭然である。分度を立てずして推讓などできるわけがないと尊徳は考える。推讓の淵源を尋ねれば勤勉にあり、勤勉を有効に活用することは分度にかかっている。分度が立てられないようでは推讓も勤勉も台無しになってしまう。だから、尊徳は勤勉にして儉約を強調し、分度をたて立ち行く道を開くよう強調する。尊徳は収入を自然体系に換算して、自然も人間も同じであると強調する。植物は春芽を出し、夏花を咲かせ、秋実をつける。そして冬蓄える。蓄えることは来年に芽を出させるためである。4分の1を蓄える。3年で1年分、9年たてば3年分の蓄えができる。30年で9年分の蓄積が可能である。9年分の蓄えがあればどんなことが起き

でも間に合うという。6年の蓄えがないのは不足であるといい、3年しか蓄えがないのを急という。自然を相手の収入であるから、天変地変が起きたらそれこそ命とりになりかねない。自然に見習えという。尊徳は言う。人間も目がで、鼻をつけ、身をつける。やがて大地に帰り、また甦ってくる。竹取物語伝説ではないが、黄泉の国から文字通り甦ってくる。自然も人間も本をただせば同じではないか。だから、人間は自然に習えと尊徳は言う。でなければ、蓄積などはできず、ましてや、人道の極みである推譲などはできるはずはない、²⁹⁾と。

そこで、尊徳の基本哲学を見ておくことにしよう。尊徳も神儒仏一粒丸を提唱する。尊徳も手段にはこだわらない。神儒仏一粒丸を提唱する。どちらかと言えば、高天原に立つ尊徳は神の足跡に神道の根拠を得ようとしているところがある。「降る道に積もる木の葉を掻き分けて天照神の足跡を見ん」とする詩を見る限り神道である。「大極の凶」にヒントをえているので朱子学、儒教でもある。尊徳は『大学』や『論語』を強調しているので儒教的である。手段に拘わらないという点では梅岩と同じである。文字に頼らない尊徳は注にいたっては氷柱といっているが、これも文字芸者と共通性がある。尊徳の勤労観は推譲につながり、分度が人道の極みとなって現れる。富者の任務は推譲にある。譲れば富み栄える。これが尊徳哲学の基本である。³⁰⁾

2. 報 徳

ここには、報徳なる精神はあがるが口利きや不当な利益は考えられない。大自然を相手にしているわけであるからいい加減な態度では自然、農業に申し開きができない。書籍もなく師匠もなく天地を経文とした尊徳は、文字通り実心実学を行ったとあってよいであろう。勤勉にして節約し、分度を立てて、人道の極みを布施としてやっていくためには勤労が十分でなければならない。だから、彼は勤勉を強調する。その仕方は徳に報いることである。梅岩が性を明らかにすると言っているが、尊徳は徳に向きあう。節約の一例をあげよう。ここに磨り減った縄がある。これを捨ててしまえばそれまでであるが、完全に物の持つ本質を消滅させてしまったわけではない。磨り減った縄をよく乾かし、薪に使えば、縄の徳を遺憾なく発揮することができる。まだ完全に徳がなくなったわけではない。使った残り灰を畑にまけば、酸性土壌をアルカリ性土壌に変え、作物の栽培に有利に働く。こうして、物の持つ徳を遺憾なく発揮させてやるのが可能である。徳に報いることも、推譲の前提条件であることがわかる。今日、他譲は一種の税金のようなものであるが、他譲と租税では天と地ほどの差がある。他譲はあくまでも倫理的な側面から出ているが、租税は法で縛られている。ここに、市場と租税の決定的な違いがある。尊徳が畦も譲れ、言も譲れ、功績も譲れ、という意味は強制ではなく、あくまでも自発的な人間愛からきているということを確認する必要がある。尊徳にとって天地が経文であるから学者の言う言説は信用していない。まじめに大自然に働きかけるものに胸襟を開く。自然が究極の頼りということになる。その延長に分度、推譲がある。報徳思想は推譲の別名と考えてもいいであろう。

推譲に相当するのは今日の企業の文化活動であろう。今日メセナの活動が顕著であるが、企業が文化活動に支出するのは推譲の極みと言えよう。トップの心意気にかかっている。俺の目の黒いうちは儲けさせて頂きたいというのでは、推譲の精神は出てこない。奈良県に靴下を専

門に製造している岡本工業がある。岡本哲治社長の心意気で、仏教文化の流布のため碧眼録を1万部刷って配る計画を打ち上げている。靴下と縁もゆかりもない碧眼録を仏教文化を知ってもらうために出版するという³¹⁾。社長の心意気が伝わってくる。この例を挙げるまでもなく、トップがいかに文化的な視点に立って企業活動を行っているかにかかっているといても過言ではないであろう。文化的視点に立っていないと推譲や布施の精神はまずもてないと考えて良い。企業を動かしているのは人であるからトップの考え如何によって企業の本質が分かる。先の長岡建設の社長長岡今朝吉氏にしても同じである。絵心のない今朝吉氏が取引先のトップと交渉するには文化的素養がないと話にならないということで絵画の研究をこころざし、役立てたと述懐しているが、今朝吉氏は推譲、布施を絵に描いたように行っている。絵画は趣味であろうが長岡建設では絵画の収集に熱心である。投機ではない。企業の業績を上げるためでもない。ごく自然に収集が行われている。甘楽町へも何点か寄付していただいている。『愚直』には随所に絵画がちりばめられている。文化の香りがする。企業の本質がどこにおかれているか『愚直』にはよく示されている。やはり、企業は文化度によって評価されると言っているであろう。今朝吉氏は郷土甘楽町を始め生まれ故郷の甘楽町造石にいろいろな施設、モニュメントを寄贈している。故郷への思い入れはあろうがやはり今朝吉氏の文化度からくる推譲と考えた方がよいであろう。公民館、造石公園の整備。地藏尊の整備、白倉天狗山への寄付、甘楽町への多大な寄付、数億円におよぶ援助。小中学校への援助、さらには先祖を大事にしている今朝吉氏は吉井町の菩提寺に石仏を寄贈している。これはたんなる売名行為ではない。今朝吉氏の心からの推譲、布施と見なしてよいであろう³²⁾。

私はしばしば近江の里を訪れたことがある。近江八幡、日野の丸葉で有名な日野、さらに五箇荘等である。この辺に行ってみると町の規模にしては神社仏閣が多く、それも立派なものが多い。近江商人の寄進によるところが大であるという。商人は神仏にはあまり力を注ぐと本体が上手くいかなくなるからほどほどにせよ、いや深入りしない方がよいというのが商人の立場である。布施や押上などは熱心でない方がよいというわけである。だが、ここ近江商人の古里に来てそれが一変した。やはり、隠徳善事に熱心であったことがよく分かる。今朝吉氏が隠徳善事に心がけているのと共通性があるといっているであろう。つまり、企業の本来的な在り方がよく分かっているということであろう。富者の任務は推譲にあり。譲れば富み栄える。尊徳のたらいの湯の例えではないが、私欲をかき、自分の方に引き寄せれば寄せるほど反対の方向へ流れてしまう。反対に相手に押し返してやれば自分の方に向いてくる。富は一個人の物ではなく天下の宝であるということがよく分かる。天道の中で人道を尽くすとする尊徳の推譲論の本質がここにある。

天下の財はけっして私物化すべきではないであろう。なぜならば財は本ではないからである。本が徳である。分度が徳であるとすれば推譲こそ徳の実践になる。財散ずれば人集まる。富を独り占めにしても天道論からはずれれば意味がない。

あくまでも天からの借り物であろう。それに労働を加えることによって有用な物に仕上げ生活に行き渡るようにし、足りなければ補う。補う方法は天が平等に分ち与える方法で平等に行き渡るようにする。独り占めは天下の災害を引き起こす、だから尊徳は富者の任務は推譲にありと強調しているわけである。依然として天道はそうした運動のもとで循環しているではな

いか。けっして富を独り占めにしてはいない。グローバルスタンダードのもと著しい富の偏在が進行している。片や1ドル以下の生活を強いられている貧困化層が億単位で存在しているという現実。片や僅か1パーセントの階層が富の数十パーセントを握っているという現実である。貧乏人の子供達が明日の飯に事欠き、億万長者の飼い犬が牛肉をたらふく食しているという現実をどう評価したらいいのか。経済合理性のなせる業として達観していいのであろうか。

3. 推譲, 布施の真意

信仰 (fides) から解放された人間理性は止めどもなく自己主張を追及する。人間本性 (human nature) はそれぞれの個を解放するが、経済、moneyは他の本性、権威 (authority)、性 (sex) の解放よりも強い。ここにmoney、経済むき出しの経済時代が登場する。いわゆる、ゾンバルトのいう経済時代 (das oekonomische Zeitalter) の到来である。W.SombartはMax Schellerに倣って経済が血縁や政治よりも有位を占める時代を経済主義に特有な時代として位置づけた。ここでは、万事が貨幣の関数である。貨幣の前にすべての価値がひれ伏してしまう。貨幣が大手を振るところでは、倫理や道徳あるいは文化までが従属してしまう。経済が大手を振るところではすべての価値が転倒し、極端な例だが最も尊い生命すらも従属してしまう。死んでお詫びいたしますでは、どうしようもないではないか。だが、現実では命を抵当にして借財が繰り返されているではないか。また、経済時代には価値低きものが大手を振るうため、本物の文化は育たない。量的に換算された方が一般的に承認されるため、価値の中身がどうなのかは二の次になる。つまり、一種の半文化しか育たない。一連の偽装事件、食品にまつわる不祥事件はその典型と考えてよい。これが近代合理主義の行き着く究極の行き着く相である。

では、この危機的状況を回避し、経済を真に人間本性の生業として実現するためにはいかなる方法があるのか。あるとすればどのような方法においてか。『大学』では「本然の性」に返れと主張する。「気質の性」に代え人間本性の生業、経済活動を取り戻す必要がある。解放された人間本性は、今、第三段階として、欲望の限界を認識し、新たな「本然の性」の回復に人間社会の真のあり方を見出そうとしている。「本然の性」の回復は一体いかに可能か。経済とは別の側面である「気質」の性を仁義礼智信で包み込むような方向で進まなくてはならないということである。具体的には、経済活動に誠意の基準を取り入れ、誠意で取引をもう一度再確認する手続きが必要ということである。誠意で裏打ちし、もう一度誠意で反省し、経済活動を誠意で包み込むことである。これは天道、人道の基準として取り入れることを意味している。先に述べたように、人道は、どうあがいても天道を無視して行えないからである。天道、人道、宇宙、大宇宙は表裏一体の関係にある。梅岩の布施、尊徳の推譲は天道、人道の中に誠の営みとしての経済活動を誠の道を取り入れることを示している。経済活動は、誠の道はずして成り立たないのである。個の究極的な解放の結果として、これ以上突き進むことができなくなった今日、誠の道、「本然の性」を取り戻し、経済活動を誠の道として実践すること以外にはないのである。尊徳、梅岩はそのことをわれわれに身をもって教³³⁾えている。

倫理や道徳から離れた企業活動や市民生活は一体どのような方向へ向かうのか。今、まさに、そのことが問われている³⁴⁾。そこで、重要になってくるのが尊徳、梅岩の推譲、布施の精神である。現代社会ではとても通用しないようなものであると思われるが、そうであればこそ、今日

推譲、布施はぜひとも現代社会の中で甦らせなければならないのではなかろうか。自然回帰とまではいかなくとも、地球有限時代の今日、推譲、布施は時代を先取りする精神を持っていると言っていいであろう。尊徳、梅岩の偉大さがここにあるといわねばなるまい。³⁵⁾ 転換する今日、謙虚に耳を傾ける必要がある。

(やまざき ますきち・本学経済学部教授)

〔注〕

- 1) 先の松岡農相の例を挙げるまでもない。
- 2) 防衛省の事務次官であった守谷武昌氏と軍需専門商社山田洋行との癒着、接待ゴルフ、飲食供応等は言語道断であろう。ゴルフに200回以上も行っているというから呆れんばかりである。飲食供応も一回百万単位の支払いがあったという。見返りを期待しての供応であることは誰の目にも明らかである。官僚がこうした状況にもかかわらず政治家（防衛大臣以下）はなにをしていたのか。官僚を使いこなすのが政治家の任務ではないのか。守谷次官のこうした言動に対して政治家は目をつむっていたのか。200回もゴルフ接待を受け、一回百万円の単位で接待を受けていたとあらば、もれないほうがおかしい。それを見て見ぬふりをしていたというのであれば、官僚を責めることは出来まい。上に立つ者の責任が問われる。官僚を批判する前に自ら猛省する必要がある。

元来、民主政治は議会政治に落ち着くが政策実行は議会で決めたことを実行するにあり、官僚が手足となって遂行するために官僚組織が誕生したはずではないか。その官僚を使いこなすのが政治家の任務である。もし、政治家が官僚の言いなりになっているとすれば、政治家の勉強不足としか言いようがない。よく官僚が悪い。官僚政治を打破しなければならないという暴論を聞くが、これは本末が転倒しているとしか言いようがない。今回の防衛省の守谷氏の行動は悪いに決まっているが、問題はなぜ政治家が最悪の事態に発展するまで手をこまねいていたかという疑問が残る。

政治家が官僚に使われるようでは、官僚主導型になっても致し方あるまい。代表質問をするというので、官僚に作文を依頼するようでは官僚政治を打破できない。国会答弁を聞いているとよく官僚の作文であると言われるが、国会論戦で官僚の世話になっているようでは官僚を十分使いこなせないであろう。結局、議会制民主主義は国民が主人であるが、それを代弁する政治家が文字通りの議会（congress, parliament, diet）を構成しなければ、本来の議会運営はできない事を肝に銘じる必要がある。

だが、現実には先の松岡農相に代表されるように、政治家が黒いカネに手を染める出来事が跡を絶っていないのが実情である。これでは官僚にしめしがつかない。官僚を説得できないではないか。政財官の癒着構造が取りざたされているが、抜本的な解決が出来ない原因を政治家自らが造っているからである。

だが、本来の政治活動、政治家の言動は違うところにあるはずである。朱子学では修己治人を謳う。人を治める前にまず己を修めなければならないと強調する。このことは『大学』の三綱領、八条目を見ればよく分かる。三綱領とは「明明徳」、「親（新）民」、「至善」で、八条目

は「誠意」、「正心」、「格物」、「致知」、「修身」、「齐家」、「治国」、「平天下」である。「明德」には「誠意」、「正心」、「格物」、「致知」、「修身」が、親（新）民には「齐家」、「治国」、「平天下」がそれぞれ対応する。

ここで横井小楠が慶応三年に二甥に送った二語があるが、それを紹介しておこう。「明堯舜孔子之道、尽西洋器械之術、止何強兵、止何富国、布大義於四海而已」。続けて二語として「君子之道修身」。ここでは修身の大切さを強調していることが印象的である。修身が出发点であるというわけである。ここに人間としてのスタート地点があるわけである。政治家といわれる人たちはこの点を肝に銘じる必要があるだろう。この単純きわまりない事がないがしろされるため命取りになる。政治家といわれる人は、修己知人の意味をかみしめて欲しいものである。

- 3) このところ企業の不祥事が目につき跡を絶っていない。三重県の銘菓赤福が期限切れの商品を販売し問題になったが、その他偽物を本物として販売していた例も取りざたされた。赤福に至っては二重に嘘の報告をしていた。追求されたら本音を言う体質にこの企業はどうなっているのかと疑わざるをえない。深々と頭を下げればそれで済むと錯覚している。企業倫理などはどこ吹く風、一体物作りをどう考えているのか、企業存在それ事態を疑わざるをえない。物作りには節度がある。基本的に賞味期限の切れた材料は使わない。添加物を使用していないと表示したら使わない。これらは基本原則である。それを平気で破っているというのであるからどこを信用して良いかわからない。一番の原因は企業のトップに責任があるということである。社長の責任である。だが、会見を見る限り社長が真に最高責任者として反省している節はないというのが現実である。自社の不祥事をなにかよそ事、他人事としてみている風潮があるということである。これでは企業の文化度が疑われても致し方あるまい。
- 4) 石田梅岩、足立栗園『都鄙問答』45頁、1935年、岩波書店
- 5) 近江商人の典型中井源左衛門は晩年、「金持商人一枚起請文」（文化2年、1805年）、をしたため子孫への戒めとしたが、その中で真に金持ちになろうとするならば隠徳善事を心がけよ、と言っているが説得力がある。本当の金持ちは二代、三代続かないと認められない。一代では成金の烙印を押されるのが落ちである。長く繁栄を保つには隠徳善事は避けて通れない。つまり、文化的素養がなければ富者とは言えないのである。
- 6) Max Weber "Die protestantische Ethik und Geist in der Kapitalismus, 1936.
邦訳、大塚久雄訳『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、1990年参照。
- 7) 石田梅岩、前掲書、巻之三、「性理問答之段」（69頁－95頁）参照。
「譬えば此一人の鏡磨者あらん。上手ならば鏡を磨に可遣。磨種になにを用ゆと可問や。儒佛の法を用るも如斯。我心を琢磨種なり。琢て後に磨種に泥こそをかしけれ」。(91頁)
- 8) 前掲書、巻之三「性理問答之段」参照。
- 9) 宇野哲人全訳注『大学』、講談社学術文庫、1983年。参照。
- 10) 丸山真男『日本政治思想史研究』、東京大学出版会、1953年。参照。
- 11) どう見ても赤穂の討ち入りは片手落ちであろう。筋を通すのであれば浅野の方に分があるはずである。ところが、徳体制建て直しの手段として処理されたのでは本来の忠義が貶められてしまう。徂徠の断は先王の道以外ではあり得なかった。これでは本来の儒学、朱子学が泣くというものであろう。

- 12) 宇野哲人全訳注『中庸』, 講談社学術文庫, 1983年。参照。
- 13) 井原西鶴『日本永代蔵』, 『世間胸算用』など参照。西鶴はカネの世を謳うが, それは世の警鐘であったことに注意する必要がある。好色物で金の魔力について多くの例を挙げているが, そうあってはならないというのが西鶴の本心である。
- 14) 石田梅岩, 前掲書, 卷之三, 「商人の学問を譏るの段」参照。
- 15) 前掲書, 卷之三, 「或ひと主人行状の是非を問うの段」参照。
- 16) 前掲書, 卷之二, 「孝の道を問うの段」参照。
- 17) 梅岩のあと心学は急速に世俗化していくが, 鎌田一窓もその一人である。たしかに, 形骸化していったが, 分かりやすくといった点では高く評価してよいであろう。
- 18) 石田梅岩, 前掲書, 卷之一「孝の道を問うの段」参照。
- 19) 三浦梅園『俣原』, 岩波文庫, 1975年。参照。
- 20) 石田梅岩, 前掲書, 卷之一, 「孝の道を問うの段」参照。
- 21) 宇野哲人全訳注, 前掲書『大学』, 「朱子序」, 参照。
- 22) 山崎益吉「企業に誠意あり」, 『人間会議』, 秋季号。2000年。
- 23) この点については, 長岡建設刊, 長岡建設53周年, 長岡不動産27年に寄せて, 『愚直に生きる—長岡今朝吉, 喜寿の歩み』に詳しく述べられている。平成13年。
- 24) この点については, 二宮尊徳の基本哲学, 天道, 人道論を謳った『三才報徳金毛録』を参照されたい。「太極の図」, 「報徳訓」など参照。
- 25) 福住正慶兄氏筆記『改訂増補 二宮翁夜話』『報徳叢書』所収, 報徳文庫, 1939年。参照。
- 26) 齊藤高行原著『口訳 報徳外記』『報徳叢書』所収, 報徳文庫, 1939年参照。
- 27) 齊藤高行, 前掲書, 参照。
- 28) 福住正兄, 前掲書, 参照。
- 29) 福住正兄, 前掲書, 参照。
- 30) 福住正兄, 前掲書, 参照。
- 31) 岡本哲治著『奈良県靴下業界の現業と挑戦』2007年, 参照。この中で岡本哲治社長は, 経営理念として, 「企業を通じて社会に貢献しつつ, 企業の繁栄と社員の幸福を図る」を掲げ, 社是として「至誠」(まごころを持ってお客にサービスしよう), 「創造」(仕事にスペシャリティを持とう), 「和合」(一丸となって目標を達成しよう)を強調している。
- 32) 長岡今朝吉氏は, 『愚直に生きる』の発刊に寄せてで「私が八十年以上の歳月をかけて学んだことに, おかげさま—人生というのは本当に多くの人の力を借りなくては歩めない—という言葉があります。今ここにこういう形で, 私を支えてくださった多くの方々へのおかげさまという感謝の気持ちを込め, 心より御礼を述べさせていただきます」と述懐しているが, まさに至言である。おかげさまとは今日も商売を続けさせていただいております, 皆様のお蔭げ, 神のお蔭げを指す言葉である。西洋では, マックス・ウェーバーが「祈りかつ働け」と仕事を天職として位置づけたが, まさに今朝吉氏のおかげ様という言葉はそれに通じるものがある。一生懸命働き, 感謝の気持ちをもって還元する相がこの言葉に端的に表れている。さらに, 株式会社さくら銀行名誉会長の小山五郎氏は「長岡さんが最も自戒しているのに, 手抜きはいけながある。…その点ではうらやましい仕事である。長岡さんは, 芸術を理解し, この点が仕

- 上げにどのくらい人知れず役に立ったが知れない。」（発刊に寄せて）と述べているが、まさに現代事業家の見本と言えるかもしれない。今朝吉氏はこのように勤勉にして、芸術を愛し、数多くの布施を実行し、企業家とはこういうものだという見本をわれわれに示してくれている。
- 33) 山崎益吉『経済倫理学叙説』（日本経済評論社、昭和56年）のなかの「いま、なぜ二宮尊徳なのか」（第3篇、第章）、ならびに『日本経済思想史—日本の理想社会への道』（高文堂、昭和54年）、『転換期の経済と社会』（多賀出版、昭和53年）など参照。
- 34) Aamartya Senは“On Ethics and Economics”1987. 邦訳、徳永澄憲、松本保美、青山治城訳、『経済学の再生—道徳哲学への回帰』のなかで、「経済学と倫理学との乖離が進んだことは倫理学にとっても不運であった」（27頁）と述べているが至言であろう。さらに同氏の“rational fools.”1982, 邦訳、大場 健、川本隆史訳『合理的な愚か者—経済学=倫理的探求』（勁草書房、1989年）参照。
- 35) ビル・トッテン氏は『必ず日本はよみがえる』（PHP研究所、1998年）のなかで以下のようなことを述べている。「30年前私が日本にやってきたとき、歩きながらでアイスクリームを食べていたら、日本人はそうした行儀の悪いことはしない、といわれた。だが30年たった今日状況は逆転した。さらに新幹線の中で、いすにふんぞり返って髭をそっていた人に、洗面所はあちらですよと注意するようになった、と」。トッテン氏はこの30年で日本人のモラルが大変化しているということを強調したいがために、上記の二例を出して強く反省促しているわけであるが、傾聴に値しよう。
- 35) 本稿を修了するにあたって、次のことは言うておく必要がある。梅岩も尊徳も立場は違え同じ視点に立っていると言ってよい。片や農業に携わり片や商業世界に身を置いていたが、言っていることは全く同じである。すでに本文で述べたが、片や厳しい自然を相手に自然の移りゆく現実を見て悟りにも似た境地に至っている。梅岩も商人の世界で同じような考え方に立っていたが、双方ともよく本質を見ていたと言っていいであろう。
- 二人とも学者ではない。どちらかと言えば実践家である。尊徳は厳しい農業関係に携わり自然の摂理から大きく学んだ。梅岩も商業という社会で体験を通して学び取った。当初、私は梅岩の思想にあまり興味を示さなかった。なぜかという、梅岩の場合商品を右から左へと直接生産しないで利を得るといことになじめなかった点も影響してか、梅岩の経済思想は実は尊徳に較べものにならぬと勝手にそう思いこんでいた。天地の経文にはかなわないとそう思ったからである。だが、そうした梅岩論が思いこみ、表面的であったかがよく分かったのはつい最近である。よい農産物を採るとよい商品を販売するのと違いはあるまい。一所懸命造ろうという点ではそう大差あるものではないであろう。いやそれどころか類似性があるのには驚かされる。悟りに至る過程ではどのような手段を選んでも構わないとするが、ここに荻生徂徠などの学者との違い、物の見方、考え方の相違が生じるように思える。しかし、毎回講義や学会などで取り上げているうちに、けっして差がないことに気づいた。世界観、存在論、経済論、人生論、実践論などどれ一つとっても同じ視点に立脚している。現代まで長く息づいて訴えている相（すがた）をみると、このへんに大きな理由があるように思えてならない。混迷する現代社会であるがゆえに、ひたむきな姿に関心が集まるのであろう。